

成願寺

季報
110

平成 28 年 8 月 18 日
(2016 年)

目次

舜学義堯大和尚三十三回忌供養会の報告	1
「怖い方の優しい言葉」百瀬文庫	2
「昭和二十年・青い空」小林真人	4
山内短信	8

発行 多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作 地人館

三十三世舜学義堯大和尚三十三回忌供養会の報告

去る七月十一日(月)、孟蘭盆会に合わせ、成願寺三十三世・中野たから幼稚園創設者 小林義堯大和尚

香語

公案現成梅雨候

(公案現成、梅雨の候)

献奉鴻恩謝徳心

(献じ奉る鴻恩謝徳の心)

星霜三十三年到如今

(星霜三十三年、如今に到る)

多寶山上、緑愈鮮

(多寶山上、緑愈鮮かなり)

焼香比丘 藤木道明



香語を唱え、義堯大和尚に対する供養のお心を述べられる藤木老師



法要の様子



進み出て焼香するご寺院様方

三十三回忌法要
が営まれました。
義堯大和尚は
太平洋戦争で灰
燼に帰した伽藍

の再建に力を尽くすと共に、刑務所篤志面接委員
布教師、大日本佛教連合会事業本部部長、東京都民
生委員協議会事務委員長、北多摩地区保護司会会長
などを歴任し、また昭和二十九年に「中野たから幼
稚園」を開設するなど、当山の法灯護持にとどまらず、
広く活躍されました。このたびの法要では、義堯大
和尚の一番弟子ともいえる滋賀県東円寺藤木道明老
師が導師をお勤めくださり、縁深い御寺院様、檀信
徒の皆様にも多数ご参列いただきました。

怖い方の優しい言葉

岐阜県清楽寺住職 百瀬文康

ただいま先住様の三十三回忌の法要を、無事にお勤めさせていただくことができました。皆様もお暑い中ご参列くださいまして、誠にありがとうございました。三十三回忌のことを清浄本然忌と申します。亡き人が本来の自然に帰り、清浄なる姿となつて極楽往生するという意味でございます。

本堂正面右手にございます銅像が、先住様のお姿非常に恰幅の良い、威風堂々とされた佇まいで、ご当山の境内、または世の中を見据えていらつしやる



岐阜県清楽寺 住職
百瀬文康老師

ように感じます。

先住様と私の出会いは昭和四十九年、先住様七十七歳。私は今六十七歳になりましたが、当時二十五歳でした。宗門の学校であります駒沢大学を卒業し、同大学の教化研修所に籍を置いておりましたが、その時の同級生に紹介されたのがきっかけで、私はこれをご縁に、以来、四十三年もの年月を成願寺様にお世話になっております。

昭和四十九年から五年間、私は毎週日曜に法事のお手伝いをさせていただきました。このご本堂で檀家様方の法事を勤めさせていただきましたが、当時、その準備を整える役が私でございました。

線香を三本横に並べて立てる際、それがまっすぐであるのは当然として、本尊様を最奥に位牌と線香と導師を勤めるご自分が一直線に通っていないと、法事の最中より気に入らないご様子。あとから先住様のお部屋に呼ばれて参りますと「お前の心が曲がつているからまっすぐにできないんだ」と大変叱られた思い出がございます。

それだけでなくも僧侶としては大変に珍しい、有髪で髭を蓄えられた風貌。眼光がきびしく、二十代半ばの私は「なんて恐ろしい方」と感じたものです。

ですが、先住様のお部屋で一言いただくと、すぐに表情が戻られる。叱るのは一瞬なんです。その和んだ表情を拝しますと、ありがたい叱咤激励のお言葉であったとわかり、すっと心に入ってくるのです。そしてお部屋には箱が用意されていて、「わかったのなら十円を入ろ」とおっしゃる。これは非常にユニークな指導法と申しましょうか、「ただで教わったことは身につかない。だから俺から何か一つ教わったら十円払え」というわけなんです。この十円で多くのことを学ばせていただき、今の私がいるなど改めて感じた本日の法要でございました。

少し前になりますが、平成二十三年十一月に国旗に龍の絵を用いたヒマラヤの王国ブータンから若き国王夫妻が来日し、話題となりました。国王夫妻が、同年三月十一日に起きた東日本大震災のお見舞いに福島県相馬市の小学校を訪れたときのお話です。国王は交流した小学生に龍のお話をされました。

「皆さんは龍を見たことがありますか。私も王妃も、龍を見たことがあります。龍は、一人ひとりの心の中にいます。私たちは「人格」という名の龍を持っています。龍は、私たちみんなの心の中に住んでいて、

「経験」を食べて成長します。だから日増しに大きく強くなるのです。大切なことは、その龍をたえずコントロールすることです。私は、ブータンの子どもたちに、自分の龍を養い育てなさい、と話していますが、皆さんも自分の龍を養い育てて下さい」。

このようなお話だったそうですが、国教が仏教であるブータンならではの、お釈迦様の教えに通じる大きな慈悲心を持つ言葉でありました。国王は必ず相手に合掌をして挨拶をされておられました。合掌をするのは仏教を信じる人の基本姿勢です。右手はお釈迦様、左手は自分自身です。ブータン国王が常に相手に慈しみを差し向ける行ないは、人と人との繋がりがや絆を豊かに潤いあるものとする出発点です。そして他の人様を思いやるということは、自分がよりよく幸せに生きることに直結するのです。幸せは遠くにあるのではなくありません。日常の生活の中で「私があなたを支え、あなたが私を支えてくれる」このような慈しみを施し合う身近な暮らしの中にこそ本当の幸せがあるのです。

これからお盆の法要が始まります。ご先祖様が里帰りされる大切な時間です。ご自宅に帰られましたら、どうか充分なご接待をお願いしたいと思います。本日はありがとうございました。

合掌

昭和二十年・青い空

義堯大和尚三男 小林貢人

先住義堯大和尚清浄本然忌に当り、故人が一番信頼していた藤木道明師を中心に多数の寺院・知人が参じ供養会勤行賜りました。

代表役員、遺族として、厚く御礼申し上げます。

幸い天候に恵まれ、その透き通った空を見上げますと、七十一年前、昭和二十年の青い空が臉に蘇ってまいります。毎々のことです。

リーダーは未熟だったこの頃、B 29の爆撃、艦載機の機銃掃射みな良い天気でした。夜間来襲も同じ。B 29はサイパンから富士山を目標に來日、それから四方に向かったそうです。高度の低い艦載機は肉眼、私たち一群を襲ってきたグラマンの操縦士が大きな眼鏡していたから間違いない。夜間空襲も照明弾落し、それが中空に浮かんで周囲一帯が明るくなると爆発音が響きだしてました。だから昭和二十年を想うとき、それは青い空に描かれるのです。

太平洋戦争の頃、私の一家は北多摩郡神代村（現調

布市）の寺に住んでいました。ガタルカナル、西はビルマと日本軍展開した頃、はや戦況は圧倒的に米英側へ傾き、米空軍来襲・本土決戦に備えようと成りました。

尤もそれは政治軍事上層部の判断で、何も知らされない一般国民は、不安だが最後は日本勝利と信じさせられていました。

その頃義堯和尚は英語力を買われ、陸軍参謀本部外国語研究部に徴用勤務してたので、人に言えぬ神経疲れを抱いて居たようです。

その政策の一つが学童集団疎開、将来ある少国民を安全地帯におき、同時にいざの時足手纏いを少なくしておこうと計画したのでしょうか。二十三区三年生以上の希望した学童は安全な田舎の寺院・寮・旅館等に寄宿し、その地の学校で学ぶと決まりました。

昭和十九年秋初頭、港区青南国民学校（現小学校）、六年四年六十三人の男児がこの寺に來着しました。

その受入れの大変なこと、義堯和尚夫婦・集落の人々総動員で炊事場。手洗いの建造・机寝具調達など、加えて七十人用大防空壕の掘削が行なわれたのです。世田谷区の学校に通っていた同年生の私は、疎開する立場と受け容れる立場を見続けていました。通学先の

防空壕掘りは辛かった。小六年の力ではスコップが硬い運動場の土に跳ね返され、進行鈍い。そう言えば、あの物不足の戦時下、スコップは不自由無しでした。

戦中戦後の公式記録・追想記・文学作品多々あり、疎開先で居住食料人間関係に苦勞した話は、それこそ五万なんぼとありますが、受入れ側の話はほんとに少ない。四半世紀前、ある筆達者と私は今のうちに、遠州地方で取材試みたのですが、受入れ寺院の方丈様も奥様も既に高齢の上「今はもういいじゃない。」と三軒続きに断られ取材断念。

そうこうする間、旧い付き合いのK夫人が逝去され、私が尼崎菩提寺の代理に伺いました。娘さん二人から「失礼な質問ですが、成願寺さんは母とどういう繋がりがあるんですか」と聞かれ、青南小訓導として児童引率、戦中から戦後しばらく私の居た寺に滞在、私の両親はじめ皆に慕われた。しかし食料不足にはお手上げ、ノミは畳を上げて角スコップで集め焼き捨て、シラミは金盥の熱湯に服ごと入れて始末。子ども達の肌は赤くザラザラ、目ばかりギラリ。あの苛酷な時代、K先生の身心の勞そりや重かった筈。そのようにお話ししました。

娘さん達は母上から、この時代の話まったく伺って

ないとの由。

K先生、遠州の寺、本当に辛かった事は思い出しにくい、話しても判る筈がないの心情だったのでしょうか。

それにしても滑稽な話、疎開児童が安全の為に住み込んだその寺は、東に高射砲陣地、電波隊基地が並び、西は兵器工場がいくつも、北は中島飛行機。これではB29爆撃機に餌を撒いているみたいだ。北多摩郡の「村」だから安全、隣りの田畑ばかり、人家も少ない給田は世田谷区：区だから田舎へ疎開しろ。実態を調べず書類で決めた。この感覚今も有りますね、法令条例の運用に。

はたして昭和十九年十一月頃からB29が飛来、青空に太刀魚みたいな銀色キラキラだ。二百五十kgの爆弾を撒き始める。邀撃の戦闘機―飛燕は少ない。寺の東、帝都防衛陣地が打ち出す高射砲弾は届かない。後で聞いたが二千米も足りなかったとのこと。

忘れもしない昭和二十年一月十九日三時過ぎ、空襲警報解除されたので玄関に戻ろうとした。先を歩くは駒大の鐵雄さん。ヒリヒリと耳に響きながら爆弾爆発、



防空頭巾に刺さった高射砲弾の破片

一瞬気を失った。ばかに頭が重いと気を戻したら、防空頭巾ごと泥に埋まってる。ぼやぼやしてるなと父に叱られる怖さに立ち上がり、見回すと鐵雄さんは言うような姿で水鉢を抱えてる。五メートル近く吹っ飛ばされたらしい。濡れ縁で縫物中の母も針を持ったまま倒されたが無事。爆弾は日本軍高射砲の不発弾、B 29に逢えず地上に墜ちた衝撃で爆発したらしい。

本物爆弾でなく助かりましたが、小学校卒業制作の水上飛行機模型の完全破損には半泣きでした。

なお文中の鐵雄さんは袋井松秀寺山中鐵雄師です。

九十すぎてもお元氣、ひよっとすると昭和二十年の爆風、実は壮健を呼ぶ香風だったかな、とあつて私は時々拝眉に参上して居ります。

昭和二十年五月二十四日夜、二十五日山の手大空襲は、三月十日隅田川方面

大空襲に次ぐ大規模なものでした。調布から見ると、東の空いっぱい明るい茜色の雲が層を成し、火花が舞い上がるのです。時の住持長谷川孝善大和尚―義堯大和尚の師匠を案じ、父は朝一番に駆けつけ無事を確認、しかし成願寺すべて灰燼と化し、骨だけの焼死体が境内に三つあったそうです。

その頃から父義堯は物思いに沈むこと多く、長女次女を新津の小林本家に預ける、酒田奥地に疎開させるなどと家族の配置、役割を口にするのです。

今察するに、参謀本部に勤めていて、戦争の進行、アメリカの占領計画を知り、敵兵に荒らされる悲惨を考え、娘二人をまず守りたい心情だったと私は想うのです。

昼間はグラマンの機銃掃射に怯え、夜はテルミット弾の明るさ、時限爆弾の音に寝不足の日々が流れ、迎えた八月十五日。

父義堯は朝早くから玄関の間を片付け、ラジオを高い所に据えた。

十一時半、父は家族、疎開学童、職員五十余人に整列を命じ、大声をかける。「これから大事な放送がある。畏

れ多くも陛下のお言葉だ。直立不動しつかり聞け」……

……それは「終戦詔勅」だった。……………

ラジオの前で泣く人はいなかったが、散って行つた。走る訳でなく、歩く訳でなく、消え去つた。私は身も心も宙に浮いた様にぼーっとしていたが、父は男どもを呼んで焚き火を命じた。そして紙の束、本、巻紙を抛りこみ始めた。(焚き火は四、五日続いた。)

中学から伝令があり、十七日朝、二重橋前に集合。「天皇陛下申し訳ありません、私たち努力不足でした」と敬礼したのです。その後続くアメリカ軍の進駐、横暴など、多彩なシーン次々思い浮かぶ。その記憶の走馬灯は永遠かと続く。

皇居前広場で陛下に謝つた後、中学へまっすぐ帰り、ある先生が「これからアメリカは3S文化『Screen』『Sex』『School』で日本完全占領を狙うであろう。『Screen』はアメリカは理想郷と宣伝、『Sex』で君たちを骨抜きにし、『School』改変でアメリカの従属国とする。……君たちは大変だけど自分の道を見つけ、しつかり歩むよう私は祈る」とおっしゃった。

七十年経ち説明不要、窮乏した食料援助から始まっ

たアメリカ式生活の浸透は衣食住すべてにすっかり定着しました。国の指導者はアメリカ政府の意を体し付度して歩み、挙げて暴走ダンプリミたいに周囲構わず法令を改め、短急に施行する安倍内閣。このまま行けば第三次世界大戦の先行者になる日本です。そして日本文明は終末を迎えるのでしょうか。

生きる者かならず死ぬ。集まる者はかならず散る。世界史上エジプトなどの大文明以下数多くの文明が発生し成長拡大し、熟成して衰亡してゆく。そして併合されるか消滅する。幾つか蘖(ひこばえ)を別文明に託す。こんな説を聞き、一時私は心酔したものです。

我孫子近くに私は筍用の竹藪をもつてます。さる人が昭和はじめ開墾、良い竹苗育て成功。四十年前私が継いで間もなく、一斉に開花そして林全部枯れました。果然としながら竹学の泰斗・京大上田弘一郎先生に对策問合せ、御返事を頂いた。『大丈夫、根つこまで枯れた後、ヒゲみたいな新根が残る。それが新しい竹林を作ります。六〇八十年位の周期です』

父のこと誌す筈が、敗戦前後の思い多く、纏まらぬ文となりました。

合草

山内短信

◎秋彼岸中日法要 修証義奉読会

九月二十二日（木・秋分の日）

十一時 受け付け始め

十二時 講談 日向ひまわり師

十三時 修証義奉読

◎秋の観音詣りのお知らせ

十一月九日（水）からの一泊で、旧海軍飛行予科練習生制度の貴重な資料を展示する「予科練平和記念館」の見学と福島県会津地方の名刹を巡拝します。宿は東北有数のラジウム含有量を誇る名湯・母畑温泉「八幡屋」を予定。

九日：成願寺朝七時集合・ご祈禱後出発―常磐道―茨城県阿見町「予科練平和記念館」見学―福島県東白川郡塙町「木の博物館」見学―母畑温泉「八幡屋」泊
十日：鳥追観音如法寺―立木観音恵隆寺―中田観音弘安寺―成願寺十九時半帰着予定

◎行事予定

成道会一泊坐禅会 十二月三日（土）夕～翌朝

納めの観音（年末の会） 十二月十八日（日）

午後二時よりご祈禱・説教・会食

◎成願寺「定例坐禅会」へのお誘い

当山は福井県永平寺を開かれた道元禅師様、横浜市總持寺を開かれた瑩山禅師様のみ教えを伝える曹洞禅のお寺です。毎週金曜日に「定例坐禅会」を修行しています。週により担当講師が代わり、坐禅の後に、岡本道雄老師の週は「写経」。大塚達雄老師の週は「読経と修証義講義」。上杉憲孝老師の週は「読経」がございます。どなたでも指導いたします。

時間：毎週金曜 十八時三十分～二十時三十分。（初めての方は十八時二十分までにご来山ください）

服装：身体を締め付けない、ゆったりとした服が適しています。お寺で着替えができます。

持ち物：筆記用具。（写経で使う筆や硯等の道具、講義で使用するテキスト等はお寺で揃えます）

参禅費：一回 五百円（通信費含む）

◎お願い：近頃流行のゲームを境内で行なう方がいます。お寺は尊い信仰の場であり、ご先祖様がおやすみになる地です。良識のある判断をお願いします。